

自死者の尊厳と

自死遺族の人権

自死遺族自助グループ「しまね分かち合いの会・虹」

代表 くわばら しょうこ 桑原正好さん

私は2006年12月27日、当時24歳だった息子を自死で亡くしました。金銭トラブルが原因でした。車の中に練炭を積み込み、一酸化炭素中毒で亡くなりました。悩みを打ち明けてほしかった…。優しいから、子供は母親には心配かけまいと上手く演技するのだと聞きました。でも、もう少し下手に演技して、私に気付かせてほしかったです。

あまりにも突然に「逆縁の自死遺族」になりました。その日が来るまで、「逆縁」も「自死」も私には全くの人ごとでした。というより、私自身の中にも、自死に対して偏見があったかもしれません。だから、とにかく人に会うのが嫌でした。声を掛けられるのも苦痛でした。外に出られないまま33年間勤めた会社も退職しました。毎日毎日「なぜ? どうして? なんで?」の繰り返し。夕方になると、亡き子を想う胸の痛みに耐えきれず畳をかきむしり、のたうちまわっていました。それでも、人前では何事もなかったかのように普通に振る舞っていました。半年後、たまたま乗った体重計は15^{kg}も減っていました。

そんな中、我が子を自死で亡くした親たちの集いが仙台市で開かれることを新聞で知りました。藁にもすがる思いでした。飛行機と新幹線を乗り継ぎ、仙台の「分かち合い」の集いに参加しました。鳥根を離れたとたん、知った人が誰もいないという安心感から、今までたまっていた涙が一気に噴出しました。ぼろぼろぼろぼろ、本当にとどまることがありませんでした。会場に着くなり、初対面にも関わらず同じ痛みを知った者同士は目と目で語り合えました。言葉にしなくてもその涙と沈黙で分かち合えました。この遺族たちにまた会いたいと思いました。私は遺族たちに生きる希望をもらいました。

2008年8月、自死遺族だけで悲しみや苦しみ、時には怒りや恨みを語り合う場所として「しまね分かち合いの会・虹」を立ち上げました。この時、中国地方にはまだどこにも当事者だけで分かち合う場所はありませんでした。山口県や鳥取県からも「分かち合い」を求めてくる遺族がいました。そのうち、山口県から通い続けていた遺族は、岩国市に自助グループとして「分かち合いの会」を立ち上げました。また、会に参加するだけでなく、苦しい時、辛い時に電話やメールで励まし合ってもいます。

ところで、皆さんは自死に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか。「死ぬ気になれば何でも出来るのではないか?」や「生きてくても生きられない人もいるのに」など、自死した人を見下すような声も聞きます。生きられなくしているのは個々人の問題ではなく、今のこの社会なのだ、ということを強く感じて頂きたいと思います。自死への色眼鏡的眼差しが、二次被害を生み出し、さらに遺族たちを苦しめています。

また、差別や偏見は、「自殺」という言葉から生まれていると思います。なぜ自ら命を絶った場合には「殺す」という言葉がつくのでしょうか。それが悪いイメージをもたらしています。だから、私たち遺族は「自死」という言葉を使っています。そして、この「自死」という言葉が遺族の間だけでなく、社会全体に広がった時、差別や偏見がなくなり、自死は「語れない死」から「語れる死」になると思います。自死した人の尊厳、そして遺族の人権を守るため、「自死」という言葉が広がり一般的になることを強く願っています。

逝った人たちと遺族たちの声なき声が、今社会全体に響きあいますように…

全国で年間約3万人の方が自死で亡くなっています。

いろいろな要因が重なり、追い込まれてしまったと思われませんが、遺族は自らを責め、また自死への偏見による二次被害にも苦しめられています。

今号の特集では、自死遺族による寄稿や県内の自死の現状等を掲載します。

自死遺族の想いや自死の予防について、この機会に考えていただければと思います。

また、大津市ではいじめを背景に中学生が自らの命を絶つという痛ましい事案が発生し、大きな問題となりました。自死の予防という観点も込めて、島根県内でのいじめの状況や対策についても取り上げます。

2009年4月、28歳の息子は、以前の勤務先の樹で、自死をしました。

どうしていいかわからない錯乱時、本来頼りにすべき方々から信じられない心ない冷たい言葉を受けました。

悲しむ前につきつけられた二次被害です。

「たいへんだったね」の一言があればどんなに心救われたことか。

自死であれ病死であれ同じ人間の死。人の最期に関わる人の言葉で、自死遺族の人生観は大きく変わります。人の最期に関わる人々は、死因で差別をしてはならないと思います。

F・A

18歳の息子を自死で亡くしてから9年になります。自責感でいっぱいのところを受けた「あなたたちがついていながら！」の言葉は、未だに忘れられません。

16歳でうつ病と診断された息子を、父母・兄姉で懸命に支えてきたことも知らずに…。

肩書はあるのに思いやりのない人が自死社会をつくっているのではないかと感じています。

R・H

毎日「死にたい」と訴える娘を亡くしてしまいました。約5年前のことです。

入院先の医療機関、嫁ぎ先の家族ともに、自死という亡くなり方をした娘に対して、突き放した対応でした。

自死でなければ、もう少しちがっていたかもしれません。

個人では限界がありますが、自死遺族同士で支えあい活動すれば、自死に対する意識を変えていけるのではないかと考えています。

M・W

会いたい

自死で逝った
愛しい
あなたへ

全国自死遺族連絡会

23歳だった息子が亡くなってから2年になります。

もう会えないという無力感が心の中に沈んでいます。

自分を責め続ける中、息子が住んでいた県外のアパートの退去の際に、“自死”は汚らわしいと蔑みの言葉と共に、瑕疵物件になるという理由で多額の補償金や改装費を要求され、二重三重の苦しみでした。

“自死”に対する理解を、社会全体で深めていかなければならないと強く思います。

Y・S

私の息子は、22歳の時、何回かの未遂の末自宅のベランダから飛び降り自ら命を絶ちました。

小・中学校で受けたいじめが大きな原因ですが、在学中だけでなく、いじめられたしこりはトラウマとなり、大人になっても本人を苦しめました。また、十代の未完成の脳に処方された多剤投薬も原因ではないかと思っています。

いじめ被害などの悩みを24時間相談できる体制の充実を図ってほしいと思います。

精神科医療の投薬は、細心の良心で処方してほしいものです。

E・A

※背景は自死遺族の手記をまとめた本「会いたい」(全国自死遺族連絡会編)